

---

# 名無しの言葉使い

昨史

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

名無しの言葉使い

### 【Nコード】

N9250Y

### 【作者名】

昨史

### 【あらすじ】

遠い過去、地球で人類と異界の者との戦乱があった。

名も無き四人の使者が発する言葉の力で地球から闇が払われた。

それから長い時が過ぎ、ある高校生の少年が本を読んでいると謎の美少女が現れた。

その少女によって、少年の平凡な運命のレールがハシゴに変わり．．．。

## プロローグ

遙か昔、地球に住む者と生ならざる者との間に戦乱があった。

その時代の地球は、目まぐるしい科学技術の発達によって人々の生活は一転し豊かなものになっていった。

神に祈りを捧げずとも、植物は芽生え成長しその実りを糧に動物達も繁栄していった。

地球の生態系はより一層の輝きを放っていた。

人々は自分達人類の可能性に胸を躍らせ、来るべき輝かしい未来に思いを馳せていた。

そこに、突如この世とは別のどこから来た生ならざる者が地球に現れた。

可能性に目が眩んでいた人類には、未知という不確かな可能性に底知れぬ恐怖を感じた。

どこから来たのか、なぜ来たのか、何者かも謎のまま人類はその恐怖を拭おうとした。

しかし、それは容易に拭えるものではなかった。目まぐるしい発展がもたらした安堵、慢心の直後の圧倒的な恐怖と不安感。

もはや人類が恐怖に飲み込まれるのは必然であった。そして、それは地球が闇に飲まれるのと同義だった。

その時、名も無き四人の使者が現れた。闇を拭う四つの確かな可能性。

四人の使者が、言葉を囁くと同時にそれは具現化されあたり一面の闇は一瞬で拭われた。

が、それと同時に新たな闇が現れる。光と影のように。使者の一人が、

「レイダウンネーム・・・フレア」

と呟いた。

他の三人の使者は、その言葉で全てを悟ったように同じように呟いた。

「レイダウンネーム・・・アクア」

「レイダウンネーム・・・トルネード」

「レイダウンネーム・・・ライトニング」

灼熱が全てを焼き尽くし、水が全てを飲み込む。

風が全てを吹き飛ばし、雷が全てを破壊した。

四つの言葉で具現化した力は生ならざる者を一瞬で消滅させた。

それでも有り余る力は、地球の文明にまでも壊滅的な被害をだしたのだった。

こうして地球から闇は拭われた・・・。

その後、四人の使者は名前を捨てた者、<sup>ネームレス</sup>四つの言葉は失われた言<sup>ロスト</sup>葉<sup>エッジ</sup>と呼ばれた。

しかし、人々の記憶からも地球の記憶からもその存在は失われていったのであった。

## 名前を盗られた日

学校の図書室で本を読む一人の少年がいる。

「言葉の持つ力ね!。」

（しかし、フレアって呪文みたいなの読んだ時頭の中でその情景が鮮明かつ強烈に想像できた．．不思議な感覚だったな。）

この少年の名前は、一之瀬 六介。

学校の休み時間に、友達もなく図書室で一人で本を読んでいるような、いわゆるイケてない男子高校生である。

学校の成績は良くもなく悪くもなく、スポーツや特技なども秀でたものもなくいたって平凡な男である。

家も平凡で、未来を約束されたり終着点のあるレールが引かれているといった特別な生まれでもない。

気づくと周りに流され、地に足が着いていないことも多々ある少々困った性格だ。

そんな六介はは昔から本を読むのが唯一の趣味で、常に頭の中で物語を巡らし妄想するのが心安らぐ至福の時だった。

「あれ?」

ページの左下の余白に何か書いてあるのを見つけた。

「こんにちは、ご機嫌うるわしゅう」

六助が文字を読んだ瞬間本が眩い光を発した。

「うわっ!」

やがて光が徐々に弱まるのと平行して、光とはある種違った眩い何かが視界に入ってきた。

どうやら少女のようだった。

ゴールドというよりプラチナの色をしたサラリとした長い髪。光を反射するような透き通った白い肌。

宇宙から見た地球のようなまんまるな碧い瞳。

そこには、幾人の美人のイメージを具現化したような美少女が立っていた。

六介は「あっあっ」と言葉をつまらせていると、

「なにこのアホっぽい人、こんなヤツがファーストの後継者だって言うの？」

見た目と反した少女の毒舌ぶりに六介はあっけにとられる。

「まあいいわ、まずその本に書かれていることは本当のことだって分かるわね？」

少女の問いに六介はなんとなくうなずいてしまった。

「四つのロストエッジで強いイメージを抱いたのはどの言葉だった？」

「っ・・・」

少しの沈黙の後、

「あーもうっ！この本を読んで一番印象に残った言葉はなにって聞いているの！」

また少しの沈黙、

「・・・フレア・・・かな」

「なーんだ。私的にはライトニングとか強そうでよかったのになー」

「え？」

「まっいいやー。とりあえず」

少女はそう言うのと、真面目な顔で六介の額に手をあてた。

「あんたの名前は？」

「六介だけど」

その瞬間、六介は額から何か大切なものが抜き出ていくのを感じた。

「あははー！やったー！成功ね」

少女は無邪気に高笑いした。

「これでファーストの力を思いのまま行使できるわ」

少女の手には、六介という赤い文字らしきものがあつた。

赤い文字は少女の頭の上にユラユラと浮遊していきやがて消えて

しまった。

「今のつて？」

「いいわ、お礼に教えてあげる」

少女は得意げに話した。

「今のはあんたの名前だったもの、名前ってどういうものだと理解してる？」

彼は、名前の重要性というものを考えたこともなかった。

彼は即興で考えを絞り出し答えた。

「うーん、人を呼ぶためのもの・・・識別するものとか？」

「プププ」

少女はそう微笑みながら、

「確かにその通りだわ、でもそれって表面上のことでもっと内面的っていうか根本的なことがあるの」

「根本的なこと？」

「名前っていうものはその人自身を意味するものってこと」

彼は少し考えた後、

「名前が個人を支配してるってこと？」

少女は目を見開いた後、嬉しそうに彼を激励した。

「そうそう！見直した！ただのアホじゃなかったのね」

彼はなぜかちよつと嬉しそうな顔をした後、脳が委縮してしまうような嫌な感覚に囚われた。

恐る恐る少女に問いかけた。

「それじゃ今の俺って」

「なにものでもないただの人ってとこ、そしてあなたの名前は私が所持している、私に支配されちゃったってわけね」

「・・・っえー！？」

こうして六介だった彼は、名前を失うのと同時に見ず知らずの少女の舎弟になってしまったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9250y/>

---

名無しの言葉使い

2011年11月27日18時48分発行